

## 第45回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 令和5年12月26日（火）14:00～15:00

2. 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室

3. 出席者 内閣府原子力委員会  
上坂委員長、直井委員、岡田委員  
内閣府原子力政策担当室  
徳増審議官、山田参事官  
原子力損害賠償・廃炉等支援機構  
山本理事

### 4. 議 題

- (1) 福島第一廃炉国際フォーラムと「廃炉の対話」、「学生セッション」、「国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i」について（原子力損害賠償・廃炉等支援機構）
- (2) その他

### 5. 審議事項

（上坂委員長）それでは、時間になりましたので、第45回原子力委員会定例会議を開催いたします。

本日の議題ですが、一つ目が福島第一廃炉国際フォーラムと「廃炉の対話」、「学生セッション」、「国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i」について、二つ目がその他であります。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

（山田参事官）事務局でございます。

一つ目の議題は、福島第一廃炉国際フォーラムと「廃炉の対話」、「学生セッション」、「国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i」について。本日は、原子力損害賠償・廃炉等支援機構理事、山本徳洋様から御説明いただき、その後、質疑を行う予定です。

原子力委員会では、本年2月に決定しました原子力利用に関する基本的考え方を踏まえ、その実現に向け注目すべき情報、重要な論点などについてヒアリングを行っています。

本件は、基本的考え方の「3.1「安全神話から決別し、東電・福島第一原発事故の反省と教訓を真摯に学ぶ」、及び「3.5原子力利用の大前提となる国民からの信頼回復を目指す」に関連したものです。

それでは、山本理事、御説明よろしくお願いたします。

(山本理事) 御紹介いただきました、原子力損害賠償・廃炉等支援機構の山本でございます。

本日は、福島第一廃炉国際フォーラムと「廃炉の対話」、「学生セッション」、「国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i」について説明をさせていただきます機会を頂きまして、誠にありがとうございます。

それでは、私の方から御説明をさせていただきます。

まず、私どもNDFでは、地域住民の方々の声に耳を澄まし、廃炉関係機関の代表者と率直な意見交換を行っていただくとともに、国内外の専門家との廃炉に関する最新の知見や技術成果・課題の共有等を目的に、福島第一廃炉国際フォーラムを開催させていただいております。この廃炉国際フォーラムでの意見交換を促進するために、フォーラム開催前に地元の方々と対話を行うヒアリング等の活動として、「廃炉の対話」、「学生セッション」、「国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i」を実施しておりまして、これらの活動で得られた生の声を収集・整理し冊子にまとめて、廃炉国際フォーラムにおいて配付するとともに、NDFのホームページでも公開をさせていただいているところでございます。

この廃炉国際フォーラムでございますが、我が国では2016年度に第1回目が開催されており、今年度2023年度ですが、第7回目を開催するに至っております。今年度の廃炉国際フォーラム開催に向けた事前のヒアリング等の活動実績は、記載してあるとおりでございます。国際メンタリングワークショップにつきましては7月29日から31日にかけて実施をさせていただいております。

これらの活動について御紹介をさせていただきます。

まず、廃炉の対話についてでございます。廃炉の対話につきましては、一方的な情報発信ではなく双方向のコミュニケーションとして、地元の皆様が抱えている廃炉に関する疑問や知りたいことを共有し、1F廃炉と地域の未来について語り合う場として開催をさせていただいております。今年の第7回廃炉国際フォーラムに向けて、2月から7月にかけて

福島県内7か所で廃炉の対話を開催させていただいております。計50名の皆様に御参加を頂いております。参加者に現在の福島第一原子力発電所の廃炉について情報を提供させていただきますとともに、それに関連するか否かを問わず御意見や質問を出していただきまして、参加者で共有をしながら議論を行っている、そんな活動でございます。

お集まりいただきました皆様方に議論のテーマを付箋に書いていただきまして、3ページの下の方にありますような形でまとめて、これを見ながら議論を進めさせていただいている。御意見を頂いた方から、その御趣旨の御説明を頂いて、東電、あるいはNDF、あるいは経産省の方から関連する回答等をさせていただいている。そんな進め方をさせていただいています。

3ページには、7月2日に大熊町で廃炉の対話が行われておりますが、その際に出た様々なテーマを載せさせていただいております。全ては読みませんが、廃炉プロジェクトに関すること、それから処理水に関すること、燃料デブリに関すること、廃棄物の処理・処分に係ること、コミュニケーションに関すること、あるいは地域に関すること、情報発信、安全、廃炉の対話等々の御意見が出て、対話を進めさせていただきました。

また4ページですが、これは双葉町での廃炉の対話の際に出た項目を載せたものでございます。やはり廃炉のプロジェクトについて、処理水について、あるいはコミュニケーション、情報発信の件、それから地域との関係、安全、その他というようなことで様々な御意見を出していただきながら、対話を進めさせていただいているという状況でございます。

続きまして、学生セッションでございますが、こちらは福島県内の現役の高校生・高専生が、自分たちが未来の双葉地域のリーダーになったと仮定して、望ましい双葉地域の未来をたぐり寄せるために今何をすべきかということを考えていただくプログラムとして、8月5日・6日、双葉町産業交流センターほかで実施をしてございます。今年は6校から高校生・高専生14名の方に御参加を頂きました。

参加者には7月21日に、事前にブリーフィングを受けていただいております。このブリーフィングの中でプログラムの内容を御紹介させていただくとともに、廃炉の現状に関する資料も提供をさせていただいております。それらを踏まえて、廃炉に関する質問等の御提出を頂いたところでございます。

1日目の8月5日でございますが、東日本大震災・原子力災害伝承館の見学、更には双葉、浪江両町内の震災遺構請戸小学校や大平山霊園、棚塩産業団地、双葉駅周辺など、数か所を巡るフィールドワークを行ってございます。その後、座学としてホープツーリズムの語

り部による情報を聴講いただいたところでございます。また、参加者から事前に御提出いただきました廃炉に関する質問等については、1日目のプログラムの最後に説明と質疑を行っているところでございます。

2日目の8月6日になりますが、双葉地域の復興や廃炉に関する客観的な情報に基づいて、将来、双葉地域、浜通り、福島県をどのような地域にしていくべきかということを描き、実現したい未来に近づくために、今からどのような政策を実施すべきかということを考えていただいて、議論と発表を行っていただいております。こうした成果も「ぼいすふろむふくしま」という冊子にまとめさせていただいて、廃炉国際フォーラムで配付させていただいております。どのような議論がなされているかということですが、出されました政策提言は非常に数が多いでございます。そして、少人数グループの中で議論をしていただき、相互に評価をし合い、その中で比較的評価の高かったものを述べさせていただきます。

「広い土地、ロボットテストフィールド等を生かした大学を建てる」ですとか、「病院が少ないので、公式のスマホアプリで簡単に診断ができるようにする」、あるいは「農地と農業機械を貸し出すような政策を取る」等々、様々な提言がなされました。

それから、「廃炉について知りたいこと」ということで、学生さんから出された疑問点等を、5ページの下の方にまとめたものがございます。原発事故につきましては「水素爆発には時間差があったのはなぜか」とか、「他県の人と交流する際、福島出身だと言うと『大変だったね』などと言われるけれども、他の地域の人たちは廃炉・原発事故に関して現在どのようなイメージを持っているのか」とか、あるいは原子力発電に関すること、廃炉作業に関すること、人材に関すること、廃炉を進めることで得られるメリットは何ですか、廃炉が進まない原因は何ですか等々です。

さらに使用済み核燃料や燃料デブリに関すること、廃炉から取り出した燃料は、共用プールにずっと入れっ放しになるのですかとか、あるいは現段階の燃料デブリの取り出し状況はどうなっているのですか等々ALPS処理水の放出に関連した御質問と風評被害に関連した御質問等もございます。廃炉作業のリスクに係る御質問等、それから避難指示の解除、廃炉後、最後に、高校生である私たちにできることは何でしょうか。そんな質問等も出されているというようなことでございます。

それでは、次、6ページ目になりますが、国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i について御説明をさせていただきます。

このような廃炉の対話、それから学生セッションに加えて、ヒアリング等活動として、

「国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i i n F u k u s h i m a」を、2019年以降、OECD/NEAとの共催により実施をさせていただいております。J o s h i k a i は廃炉に関する情報提供を行いますとともに、廃炉をはじめとした福島の問題に取り組む理工系女性人材の将来的な獲得を目指して、福島県をはじめとした女子高生等を対象に、国内外の理工系女性研究者・技術者との交流を通じて、科学・工学への関心を高めるイベントとして、女子高生・女子高専生を対象に行っているものでございます。高校・高専の女子学生に対して廃炉を含む原子力分野に携わる魅力を伝えさせていただきますとともに、社会で活躍する研究者等から刺激を受けて、主体的な進路の決定に役立ててもらえればありがたいというふうに考えているところでございます。

共催者のOECD/NEAでございますが、ミッションとして加盟国の労働力確保や次世代の原子力専門家やリーダー育成の支援をしております。OECD/NEAの認識によれば、原子力部門における女性の過少な比率は、高度なスキルを備えた多様な原子力労働力を維持する加盟国の能力に直接的な影響を与えており、より多くの女性を科学、技術、工学、数学、いわゆるSTEMの分野のキャリアに引きつけて、この分野で多くの女性に御活躍いただけるように、国際メンタリングワークショップを推進しているということでございます。

それで、我が国におきます国際メンタリングワークショップについてでございますが、これはOECD/NEAとの共催で2017年に最初のプログラムが開催されております。当時、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構、QSTさんが目指す多様性向上に向けた取組の一つとして、次世代の女性研究者育成支援を目的として実施されたと伺っております。その後、翌年になりますが、2018年には国立研究開発法人日本原子力研究開発機構、JAEAが、やはりOECD/NEAとの共催でメンタリングワークショップを開催しておられまして、2019年度以降、私どもNDFがOECD/NEAと共催でJ o s h i k a i の開催をさせていただいているところでございます。

ちなみに、2019年は対面で開催をさせていただきましたが、2020年と21年はコロナの影響がございまして、ウェブ開催とさせていただきます。2022年からまた対面で開催させていただいて、そういう意味で今年是对面での開催に戻って2回目というようにでございます。

そして、今年の開催概要についてでございます。今年7月29日、30日の二日間にわたってワークショップを開催してございます。そして、翌7月31日になりますが、これ

は希望者のみになりますが、1Fの視察を行っていただいているところでございます。この会は、福島県教育委員会の後援を頂きまして、JAEA、QST、AIST、東京工業大学、東北大学、それから福島大学に御協力を頂いて、会を開催させていただいております。

お茶の水女子大学の前学長であられます室伏先生に国内の共同議長をお願いしまして、DOEの国際原子力政策協力担当副次官補、アリシア・ダンカンさんに海外の共同議長を務めていただきました。また、国内の共同議長代理として、日本大学の渡辺先生をお願いいたしました。それから、メンターの皆さんでございますが、国内からはお茶の水女子大学の佐々木先生、九州工業大学の上條先生、それから東京電力パワーグリッド株式会社の府中さんに国内のメンターのお願いをいたしました。海外のメンターでございますが、スウェーデン放射線安全局長官のニーナ・クロミニエルさん、ルーマニア国立ホリア・フクベイ国立物理学原子核工学研究所のダイナ・ニクラエさん、それからOECD/NEAからはディアンヌ・キャメロンさんに海外のメンターをお引き受けていただいたところがございます。

参加者でございますが、今年は生徒全員で46名の御参加を頂いたところでございます。

今年のアジェンダでございますが、1日目は主催者、共催者、来賓の皆様による御挨拶を頂き、また、開催地である富岡町の町長にもお越しを頂き、御挨拶を頂いたところがございます。

その後、国内、海外の共同議長から自己紹介を含め、これまでのキャリア、女性が理工系で活躍することの重要性等について御講演を頂きました。また、各メンターの皆様方にも自己紹介を交えながら、現在の仕事の内容、これまでのキャリア、御家族の話、趣味の話など御紹介を頂き、これまでのキャリアで悩んだことですか、分岐点での決断、あるいは家族のサポートなどについて共有していただいたところがございます。

その後、「福島レクチャー」として、福島第一原子力発電所の廃炉の現状とロードマップ、及び復興の取組について、経済産業省の職員の方から講義を行っていただきまして、事故当時の様子ですとか、その後の福島復興の取組、廃炉を含む情報をカバーしていただいたところがございます。

これらの情報を踏まえまして、1回目のグループディスカッションが行われております。生徒さんを8グループに分け、それぞれにメンター1名配置いたしまして、ディスカッションが進められております。メンターに対して、なぜ理工系に進んだのですかといった質

問や自身の悩みなどがグループ内で共有され、講演やレクチャーに関するディスカッションが行われたところでございます。

そして、1日目の最後に、参加者間の交流も兼ねて、レセプションを実施してございます。

2日目は、冒頭に、F-R-E-Iの山崎理事長をお迎えして、「未来のリーダーとなるために」というタイトルで御講演を頂戴してございます。

引き続き、7つの機関、大学から9名の女性職員・女性研究者にお越しいたきまして、ポスターセッションを実施していただきました。学生たちは90分間で全てのポスターを順次めぐりながら御説明を聞いていただいて、理系の職業の実情に触れ、将来の選択肢の幅を広げることに役立てていただけるものと考えております。

このようなことでございますので、講師は様々な分野の若手女性研究者を御推薦いただけるように、協力機関、大学に依頼をしたところでございます。また、ポスター発表の対話の中では、研究発表に関する情報だけではなくて、現在のライフスタイルですとか、進路の選定時に悩んだことなども共有されて、学生に近い年齢層の社会人から現状に則した情報提供をしていただいたということでございます。

その後、2回目のグループディスカッション、それからプレゼンテーションの準備を行っていただいております。1日目とは異なったメンターを配置して、将来に関して思うこと、あるいは発表を聞いて考えた方針などについてグループ内で討議を行っていただいているところでございます。

また、このグループディスカッションの時間帯を利用いたしまして、引率先生向けのセッションとして、「なぜ理系に女性が少ないのか」という本の著者でございます東京大学の横山教授に、引率教諭に対する講演を実施していただいて、女子高生が理工系に進むためにどのようなサポートが学校としてできるのか、その障害になっていることは何か等議論をさせていただいたところでございます。

学生さんの方ですが、グループディスカッションの後、グループ発表を行っていただいております。本プログラムを通じて学んだことをグループごとに自由に御発表いただくということでございます。英語でプレゼンしていただいたり、あるいは自ら台本を書いて寸劇で学びを表現するなど、独自の個性が見受けられました。福島県教育委員会の教育長にも御同席を頂いて、御講評を頂いたところでございます。

2日目の最後のアジェンダとして、ラウンドテーブルミーティングを行ってございます。NDFからは理事長の山名が参加をし、また、OECD/NEAからはマグウッド事務局

長に御参加を頂いて、それぞれのキャリアや経験談の共有をしていただき、参加者との対話、感想、不安など意見交換をさせていただいて、それを通して国際メンタリングワークショップの総括を行ったというようなことでございます。

3日目ですが、希望者に対して1Fの視察をしていただいております。学生さん、それから引率教諭の皆様方、それから海外メンターの皆様方含めて、総勢50名が参加してございます。

参加者からは、メンタリングワークショップの後、感想文を頂戴してございますし、また、ワークショップの前後でアンケート調査をさせていただいております。少し感想について御紹介をさせていただければと思います。

自身の成長について、国際的な交流の場に参加することによって自分の視野が広がったですとか、少し遠回りをしてもしやることが実現できると前向きに感じる事ができた。豊富な経験があるメンターからたくさんのアドバイスを頂き、未来を決定するための勇気になった。廃炉や復興を進めるために様々な分野の技術者や科学者が日々新しい技術の開発をしていることを知ることができた。1F視察は貴重で、自身の目で見ることによって震災の脅威を実感した。震災後の福島に行ったことがなかったので、日本人として知っておくべきことをこの機会に詳しく知ることができてよかった等々です。

また英語の重要性を感じましたとか、あるいは海外の大学に進学することへの興味を持つようになりました。というような御感想もいただいております。その他、進路について、グループディスカッションについて、ポスターセッションについて、様々な御感想を頂いているということでございます。

効果測定アンケートの方でございますが、これは事前のアンケートと事後のアンケートの回答数が若干異なっておりますが、パーセント表示をさせていただいております。全ては御紹介いたしません、幾つかかいつまんで御紹介させていただきます。例えば4番、理系教科が「非常に好き」及び「好き」とお答えになられた方が6割から7割5分ぐらいまで伸びている。それから、女性専門家のいるネットワークへの参加に「とても興味がある」及び「まあまあ興味がある」とお答えになられた方、これは前後で変化はございませんが、95%とか94%、非常に高い割合で興味を持っておられていることがうかがい知れると思います。

それから、1F廃炉に関して「よく理解できていない」及び「全く理解できていない」とお答えになられた方が、J o s h i k a iの前では95%ございましたけれども、J o s



h i k a iの後では13%まで、これは激減していると見てよろしいかと思えます。1F廃炉はじめ福島復興に海外の知見が「必要である」というふうにお考えになられている方が6割から9割ぐらいまで増えてきている。こんなような変化が見てとれるかと思えます。J o s h i k a iについてはそのような状況でございました。

それらを踏まえて、第7回福島第一廃炉国際フォーラムの開催概要について御説明をさせていただきます。

今年は8月27日に双葉町において1日目を開催し、福島第一廃炉と地域の未来を考え、地域の皆様の声に耳を澄ませることをテーマとして、220名の方々の御参加を頂いたところでございます。2日目は、いわき市の方に移りまして、本格的な燃料デブリ取り出しに向けて技術専門家とともに、様々なディスカッションを行わせていただきました。2日目は376名の方に御参加を頂いております。二日間延べで596名の御参加を頂戴したところでございます。

1日目でございますが、事前のヒアリング等活動に参加された福島県内の市民の方々のうち、廃炉国際フォーラムに登壇することに御協力を頂ける方々にパネルディスカッションへの参加を依頼し、8名の登壇者をお願いをしたところでございます。廃炉の対話から4名、学生セッションから2名、国際メンタリングワークショップの方から2名でございます。

一方、1F廃炉の関係者としてはNDF、経済産業省、原子力規制庁、東京電力の代表者が海外の有識者とともに、廃炉技術に関する不安や疑問に耳を傾けて、それらに対する情報提供を行わせていただいたところでございます。

そして、パネルディスカッションの内容でございますが、議論を進めながらホワイトボードに、議論の内容が分かるように「グラフィックレコーディング」という手法でその内容を整理したものを、こちらに載せさせていただいております。今年の議論として、ALPS処理水の話ですとか、燃料デブリ取り出し、地域経済復興に係る課題、双葉町の可能性について、重要なのは産業の創出ですとか、地域との対話、あるいは注目する技術については廃棄物、燃料デブリの欠陥点、データの改ざん、少し不安だね、そんなような話題も出てございます。

そういうようなことで、パネルディスカッションが終了してございます。

2日目は、「専門家と考える1F廃炉：本格的な燃料デブリ取り出しに向けて」というテーマを設定させていただきまして、廃炉に係る技術的な専門家に集まっていただいて議論

を進めさせていただいたというようなことでございます。

それでは、まとめに移らせていただきます。

廃炉をはじめとした福島の問題に取り組む理工系女性人材の将来的な確保を目指して、福島県をはじめとした女子高生等を対象に国内外の理工系女性研究者・技術者との交流を通じて、科学・工学への関心を高めるため、NDFはOECD/NEAとの共催で、2019年以降国際メンタリングワークショップを、開催をさせていただいております。

実施内容は女性の人生に関わるような部分、あるいは理工系分野のキャリアパスについて、福島第一原子力発電所の廃炉について、このようなことにハイライトを当てながら、毎回継続的に改善を進めながら務めさせていただいております。

そして、廃炉国際フォーラムの実施による情報の提供と合わせて、福島第一原子力発電所の廃炉の状況、福島の復興に関して、参加者に御理解を深めていただき、関心を高めていただいていると理解をしております。

以上でございます。どうもありがとうございます。

(上坂委員長) 山本さん、廃炉の対話、国際メンタリングワークショップ、学生セッション、それから最後の第7回の福島第一廃炉国際フォーラムの成功、大変御苦労さまでございました。

それでは、委員会の方から質問をさせていただきます。

それでは、直井委員。

(直井委員) どうも御説明ありがとうございました。

まず初めに、廃炉の対話についてコメントをさせていただきますけれども、地域の方々の関与と事実の共有なくして、廃炉は前に進まないということで継続されているということで大変素晴らしい活動だと思います。

私も今年の「ぼいすふるむふくしま」でどういった議論がなされていたのかというのを読ませていただいたのですが、その中で南相馬市で行った対話の中で、NDFが廃炉を進める体制について説明をされていて、その体制図に国だとか東京電力、それからNDFの役割が示されていたのだけれども、南相馬の住民の方は、その矢印が住民につながっていないというようなコメントが出されていて、どきっとするようなコメントが記載されていました。

こういったコメントにしっかりと耳を傾けていくということが大切なことだと思います。続きまして、学生セッションなのですが、福島県内の現役の高校生、高専生を集め

て行ったということで、これもとても重要な取組であったと思います。

それから、議論の中身も紹介いただきましたけれども、非常に充実した議論がなされていて、元気づけられるという内容でありました。県内の若者に正確な知識を身に付けていただくことと、それから関心を持っていただくこと。まず関心を持っていただくということが、これから廃炉を進める上で非常に不可欠なことで、これからもこういった活動を続けていっていただきたいと思いました。

それから、国際メンタリングワークショップ J o s h i k a i ですけども、国内外の理工系の女性研究者・技術者にメンターになってもらって、その交流を通じて科学・工学への興味を抱いてもらうということがその目的であったわけですけども、私は何よりも福島で行ったということが非常に重要なのだというふうに思いました。

福島の廃炉というのは福島県だけの話ではなくて、風評被害などは日本全体、それから世界にも及ぶということがありまして、若い人たちに正しい知識を身に付けてもらう、関心を持ってもらうということが非常に大事だと思いました。カリキュラムも大変充実していて、関心をいたしました。

それでとてもよい取組をされているのですけれども、2点ほど要請、要望がございまして、1点は、こういった非常にすばらしい活動をされているので、例えば学生セッションに参加された方も恐らく最初の学生セッションや J o s h i k a i に参加された方は社会人になられているのではないかと思います。そういう学生セッションに参加された方、J o s h i k a i に参加された方が、今どのような状況になっているかというところを、追跡調査をしていただけると、なかなか個人情報等もあって難しいかもしれませんが、そういう追跡調査で成果が見えてくると非常に勇気づけられるのではないかと感じました。是非ともそういうことができるのであれば、できる限りやっていただきたいなという点が1点。

それからもう1点は、「ぼいすふろむふくしま」を読ませていただきましたけれども、これは是非国際的にも発信してほしいというところが要望としてございます。やはり英語で発信をしていくことが国際的な理解を得る上でも非常に重要ではないかと感じました。

私の方からは以上でございます。ありがとうございました。

(山本理事) 御丁寧な御議論を頂きましてありがとうございます。

まず、学生たちのその後の就職活動等でございます。これにつきましては、直井先生もおっしゃったように、個人情報に類するものでございますので、その取扱いについては慎重

に対処していかざるを得ないと考えております。

それから、「ぼいすふろむふくしま」の英語の件でございますが、これにつきましても関係者と相談をさせていただきながら、検討させていただければと考えているところでございます。どうもありがとうございます。

(上坂委員長) よろしいでしょうか。

岡田委員、お願いします。

(岡田委員) 山本様、御説明ありがとうございます。

様々な試みによっていろいろな層の方の意見に耳を傾けている活動に大変感謝いたします。そして、今回廃炉の対話の方で質問をさせていただきますけれども、このときの年齢構成はどういう人たちだったのか、男女比はどんな感じだったのかというのをお聞きしたいと思います。

(山本理事) 正確に統計を取っておりませんが、「ぼいすふろむふくしま」の方に写真も載せています。今、ぱっと見て、男性の方が少し多く、また年齢的には御年配の方もいらっしゃる、比較的若い方もいらっしゃる、そのような状況かと思えます。

(岡田委員) ありがとうございます。こういう対話は今後も継続して、多くの人たちに参加していただいて、廃炉の問題を共有していくことが大切だと思います。

もう一つ、廃炉ですが、2ページのところで、福島のような地域でこういう活動をしていますけれども、私は福島と他の地域、例えば都心ですね、そういうところとの意識の格差は大きいと感じています。山本さんはその点について、この仕事、もしかしたら廃炉機構の仕事ではないのかもしれないのですが、福島と都市部とか、ほかの地域との格差、そこを埋めていかないといけないと思っているのですが、どう思われますか。

(山本理事) 原子力事故に対する様々な御意見、これは福島県内の皆様方と県外の皆様方がどのように違っているかということについては、たしか福島大学の先生、あるいは東京大学の先生も非常に丁寧に調査をされておられるかと思えます。

その中で、私の記憶でございますので、正確でないかもしれませんが、やはり地域によって少し認識に差が出てきているということは私も感じております。

(岡田委員) 廃炉については、是非ほかの地域の人たちにももっと情報が行くといいなと私は思っております。

次に、学生セッションについてお聞きしたいのですが、現役の高校生、高専生は、今回参加することでどのようなことを感じたかというところを、変化みたいなのを感じられまし

たかという質問です。

(山本理事) メンタリングワークショップの方は前後でアンケートを取っておりますが、学生セッションの方は実施しておりませんので、学生の皆さんの意識がどのように変わっているかというようなことについては、今後進めていく上でそのような御意見も参考にさせていただきながら、進め方も検討してみたいと思います。

どうもありがとうございます。

(岡田委員) 次は J o s h i k a i についてですけれども、実施後のアンケートについて、何か踏み込んだ原子力について興味ありますかみたいなのはないような気がしたのですが、今後こういうアンケートを取って、原子力の技術について、例えばALPS処理水がどういうふうに処理を行っているかというのに対して、すごい興味を持ったとか、何かそういう質問、もう少し原子力に踏み込んだ質問もあってもよかったかと思ったのですが、いかがでしょうか。

(山本理事) 御意見ありがとうございます。

これからもいろいろな方と御相談をさせていただきながら、進め方をまた今年も考えていくと思いますので、その中で検討をさせていただければと思います。

ありがとうございます。

(岡田委員) 最後の質問ですけれども、ちょっと気になったところがあって、第7回福島第一廃炉国際フォーラムのところのパネリストなのですが、男性ばかりのような気がしたのですけれども、私は今女性の研究者を増やしたいという活動をしています。何とかならないでしょうか。

(山本理事) 11ページの写真でございますね。パネリストの右側のことをおっしゃっておりますか。

(岡田委員) 左側ですね。パネルディスカッションの、これ全部男性。2日目の開催状況で、全部男性なので、やはり難しいのでしょうかね、これ。

(山本理事) 特にこちらから選んでいるわけではございませんけれども、是非女性の方にも参加していただけるように配慮してもらいたいと思います。

(岡田委員) 今後は是非女性もここに入れてください。お願いいたします。

以上です。

(山本理事) ありがとうございます。

(上坂委員長) それでは上坂から幾つか質問をさせていただきます。

廃炉の対話ですけれども、この資料の5ページですね。これは学生セッションかと思えます。高校生、高専生の政策提言が、代表的なのが書いてあるのですけれども、これを見て、いわゆる公的な話とか、ビジネス的な話とか非常に元気がいい提案がありました。先ほど直井委員がおっしゃった、この廃炉の活動が地元はどう根付いていくかということです。若い世代の人がこういうビジネスを福島でやっていただけると正にそうなるのではないかと思いますので、いかがですか。そういう実感等ございましたでしょうか。

(山本理事) 正直申し上げて、高校生の皆さんにお集まりいただいて、福島の現状は今こんなことですよと、少しデータも見ていただきながら将来こういうふうになるために今どうすべきなのかという御議論をしていただいているわけですが、そのことですぐに何かが変わるといことも正直申し上げてございませんで、やはり福島のことについてしっかりと皆さん興味を持っていただいて、様々な観点から御議論いただくということが非常に大事だと思っています。

(上坂委員長) 以前、福島関連のシンポジウムで、復興に関するセッションで、若いビジネスマンの方が福島でスタートアップされて、そして福島はビジネスチャンスであると。そういう元気のいい頼もしいビジネスマンの方が何名かいらっしゃったことを覚えています。そういう方々もここに来て一緒に、具体的に話していくというのは今回なかったのでしょうか。

そういう既に福島の方で何か復興に関するスタートアップビジネスを始めている会社の方がいます。

(山本理事) ありがとうございます。今年はそういう観点で御登壇はいただいていたかと思えますけれども、今後進めるに当たって、いろいろな皆さんとも御相談をさせていただきながら、やり方を考えさせていただければと思います。どうもありがとうございます。

(上坂委員長) たしか去年の日本原子力産業協会が東京で4月に開催した原産年次大会の、福島セッションでスタートアップの若い社長さんがお話しされていたと思うのです。是非次回はそういう方も、学生と年齢も近いと思いますので、一緒に議論をされると、議論の内容もより具体的になるのではないかなという感じがいたします。

それから、この廃炉の対話や学生セッションに、社会学者の東大の開沼先生や、医学者で原子力災害伝承館館長で長崎大教授の高村先生も加わられていると思います。議論の仕方も、以前はホワイトボードに付箋を貼っていたのが、最近はそのが電子化されて、画面上でできるようになっている。それから開沼先生は廃炉ボードゲームを作られて活用されて

いるとか、伺っていました。今回、開沼先生の講義や高村先生の講義や、何か特徴的な講義とか、あるいはそれに対する評判とか、何か特徴的なことはございましたでしょうか。

(山本理事) 特徴的ということでございますと、今年はF-R E Iの山崎理事長にお越しを頂いて、御講演を頂きました。私が覚えておりますのは、大学に入って、君たちがやるべきことというようなことで3点ほどお話しただいて、まずは個人として成長しなさいですとか、専門性を上げなさいですとか、あるいは学生の中に2回は留学しなさいというようなことを非常に強くおっしゃっておられましたですね。そんなことを特徴的なこととして覚えております。ありがとうございます。

(上坂委員長) 今、F-R E Iのお話があったのですが、5ページの先ほどの政策提言に関する若い高校生・高専生の意見というのは、正にロボットや農業機械、地域振興、水素エネルギーですね、正にF-R E Iの分野1, 2だと思いますし、それからJ o s h i k a iの方にいきますが、11ページの前後のアンケートを見ても、海外に「興味がある」とか、積極的な意見がありました。是非今回と同様にF-R E Iと連携されて、F-R E Iが今5つの分野として検討されていることを、地元はどう捉えているのか。具体的な議論をするようなセッションも今後も考えていただけると、廃炉・復興の活動が、地元と結びついて次へ向かうかなというような感じもいたします。是非よろしく願いしたいと思っております。

それから、今の同じ11ページなのですが、今度はJ o s h i k a iの方です。海外留学に「興味がある」、それから海外で働くことに「興味がある」という回答が出てきて、また福島復興に海外の知見が「必要である」ということ。学生さんたちが海外に目を向ける非常にいいチャンスだったということが、このアンケートで分かります。そのためにも、今回ルーマニアから9名の学生が参加して、一緒に講義を受けてディスカッションをしたということもとても大きかったのではないかと思います。このルーマニアになったというのはどういういきさつでしたか。

(山本理事) J o s h i k a iを開催するに当たって、私どもの方でアジェンダを作って、それでOECD/NEAと相談をさせていただきながら、アジェンダを纏めていく、そのようなやり方をさせていただいております。海外からお越しを頂いている共同議長の皆様とか、あるいはメンターの皆様、それから海外から御参加いただく学生の皆様方につきましては、OECD/NEAの方から御推薦を頂いて、それでお越しを頂いているということで、今年はルーマニアからお越し頂きました。

(上坂委員長) そうであれば、今後も是非海外の学生をルーマニアに限らず、広く世界から参加を募って、一緒にテーブルでディスカッションをすると、きっと日本の学生にとってもいい交流、国際的視野を広げるいい経験になると思います。主催者であるOECD/NEAと引き続き相談して、是非海外の方も参加していただけるように、今後も企画していただければと存じます。

それから、今度は逆に、福島的女子高生を、海外で開催されるJ o s h i k a iに参加させるのも、とても重要ではないかと思うのです。こういう方向はいかがでございますか。

(山本理事) 余り具体的に考えたことはございませんで、先生の御意見も踏まえながら、今後どのように進めていけばいいのか、そんなことについてもまた議論させていただければというふうに思っております。

(上坂委員長) 私も、大学にいたときに加わっていたのですが、日本原子力人材育成ネットワークというのがございまして、そこに五つの分科会があって、そのうちの一つに初等中等教育分科会という小中高生の教育に関する分科会があります。このネットワークの事務局はJAEAと原産協会の人材育成の組織に置かれております。是非そこに御相談されて、今後は日本の学生を海外のこういうJ o s h i k a iのような国際活動に参加するというのも、是非御相談してみただければと思います。

それから、最後ですが、J o s h i k a iの方の講師の先生方ですが、7ページに今回のJ o s h i k a iの講師の先生方のラインナップがあります。私としては是非次回は、原子力系の女性の先生も1名以上は加わって、原子力や放射線の話をしていただければと期待します。岡田委員が参加されているW i N G l o b a l、日本支部である日本W i N J a p a n、あと原子力学会のダイバーシティ推進委員会、日本原子力人材育成ネットワーク、JAEAのI S C Nの人材育成部等、女性がたくさんいる組織があります。是非これら組織と今後御相談されて、そこに原子力系の女性の先生も入れていただけるとよろしいかなと思いました。

私からは以上でございますが、ほかの委員から質問等はございますか。

よろしいですか。

それでは、どうも御説明ありがとうございました。これからも是非この活動を続けてください。よろしく申し上げます。

議題1は以上でございます。

次に議題2について事務局から説明をお願いいたします。



(山田参事官) 事務局でございます。

本日が、今年で最後の定例会議になります。本年は特に原子力関連の動きが多い1年でもありました。

上坂委員長より、本年を振り返ってのコメントを頂きたいと思います。お願いいたします。(上坂委員長) それでは、原子力関連の動きを私からまとめてお話しさせていただきたいと存じます。

まず、2月10日ですが、GX実現に向けた基本方針の閣議決定がありました。ここで原子力の活用として長期運転、次世代革新炉への建て替えの具体化、核燃料サイクルの推進、廃炉の仕組みの整備、最終処分の実現に向けた働きかけの強化等が明記されています。

また、2月20日ですけれども、原子力利用に関する基本的考え方を原子力委員会が決定いたしました。これは1年以上掛けまして、50名以上の有識者からヒアリングを行って、検討を重ねました。特にその40%が人文社会学の有識者の先生でございます。この月の閣議において政府としての尊重される決定がなされたところであります。

それから、5月末、GX脱炭素電源法、脱炭素社会の実現に向けた電気供給体制の確立を図るための電気事業法等の一部を改正する法律が成立いたしました。

それから、5月から6月にかけて、この原子力委員会で医療用のラジオアイソトープのアクションプランの第1回目、つまり1年目のフォローアップを実施いたしました。そこで、書面でのフォローアップのほか、RI協会、日本原子力研究開発機構、QST、大阪大学、福島県立医科大学、文部科学省からヒアリングを実施いたしました。順調に政策が実行に移されているなという実感でございました。

それから、8月24日に、ALPS処理水の放出がありまして、ここまでに18日ずつ、合計3回実施されているという状況でございます。

そして、9月の終わりにIAEAの総会に、高市大臣が出席して、日本の原子力政策、それからALPS処理水放出の安全性等の一般討論演題をし、また、その後、主要国との会談も実施されました。私も出席してまいりました。

それから、11月、FNCAの大臣級会合がタイで行われまして、アジアでの原子力協力の議論がなされました。

11月ですが、ロシアによる包括的核実験禁止条約、CTBTの批准撤回について、原子力委員会委員長として談話を発出させていただきました。

また、12月16日、私上坂の委員長再任、それと直井委員の任命が行われたということ

でございます。

以上、私の今年度の原子力政策に関するまとめとさせていただきたいと存じます。

それでは、事務局から来年の開催についての連絡をお願いいたします。

(山田参事官) 事務局でございます。

今後の会議予定について御案内いたします。

次回の定例会議につきましては、来年1月16日火曜日14時から、場所はここ、中央合同庁舎8号館6階623会議室で開催いたします。

議題については調整中であり、原子力委員会のホームページなどによりお知らせいたします。

以上です。

(上坂委員長) ありがとうございます。

それでは、他の委員から何か発言ございますでしょうか。

(岡田委員) ありません。

(上坂委員長) 御発言ないようですので、これで本日の委員会を終了いたします。

お疲れさまでした。ありがとうございます。